

## 神戸の水

「神戸の水は、世界で一番おいしいって、知つてゐる？」

坂道をのぼりながら、先生がみんなに聞きました。

「えつ！」

「ほんまに？」

みんなは、おどろいたようにざわめきました。

それは、年に一度の全校生徒会の日でした。わたしたちは、新神戸駅の近くにある布引のたきに向かっていました。リュックサックをせ負い、一列になつて歩いていました。

「神戸の水はね、食品の国さいコンテストで金賞をとったことがあるのよ。『神戸ウォーター』っていう名前で多くの人に親しまれているの。」

先生が、少し息を切らしながら話しています。

「神戸には港があるのでよ。そこへやつてくる世界中の船乗りさんたちが神戸にやつて来ると、ここに水はおいしいことと聞いて船に持ちこむんですって。赤道をいえるくらいに遠くまで行っても、おいしく飲めるそつよ。船乗りさんたちはみんな、神戸にあこがれていたのね。」

「そんなにすごいんや、神戸の水つて。」

神戸の水が有名なことを初めて知ったわたしは、うれしくなつて、坂道をのぼりひさをわすれていきました。

「六甲山にはたくさんたきがあるのよ。わき水もたくさん出ていて、わたしたちが家で使う水にも使われている。」

ふだん、自分が使う水のことなんか考えたことがなかつたわたしは、おどろきました。

「へえ、六甲山の水を飲んでたんや。」

坂道をのぼり続けていくと、水しぶきを上げて流れ落ちる水が目にに入りました。

「わあ、きれいやなあ。」

「す」「こ」な。

立ち止まって、そのたきを見上げました。

「こ」「こ」が、めんたきです。高さは「一メートルくらい」ね。でもこれでおどろこぢゃこけないわよ。」

先生はそういつて、また坂をのぼり出しました。わたしたちもめんたきを横に見ながら、坂をのぼつてこきます。途中に、小さなたきが一つありました。どちらもきれいな水が流れ落ちています。

せりてのまつて「べく」と、「一」と二つ大きな音が聞こえてきました。

「さあ、これがおんたき。」のたきが布引のたきとよばれてこます。高さはめんたきの倍の四十メートルよ。」

先生はたきの方を見上げながら、説明してくれました。

「わあ、す」「こ」。そしてきれいな水…」

わたしは、思わず声に出して言いました。すると、先生が、

「そうね、大きいし、水がとってもきれいね。だって、神戸の水は世界一だものね。」

と言つて、わたしに笑いかけました。

わたしは、町の近くにこんなに美しいたきがあるとは知りませんでした。

「よし、」のたきしげみひ。

わたしは布引のたきをかくことにしました。

たきを見上げては筆をとり、画用紙にかいてはまた、たきを見上げます。何度もくり返していふうちに、すっかり布引のたきの風景がわたしの頭の中に入つてしまつたようです。水が流れる様子を表げんするのには苦労しましたが、きれいな水だとわかるよひにかきました。水しぶきが上がるといふも、うまく仕上がり、満足のいく絵が完成しました。

「あと十分で集合よ！みんな、そろそろかたづけ始めて。」

先生の声が聞こえました。

周りはいっせいにあとかたづけを始めました。筆をあらひて絵の具をしまわなければなりません。筆の絵の具をあらった水は、いろいろな色がまざつて、ひどくにじっています。この水は、ペットボトルに入れて持ち帰り、学校にもどつてからする約束になつていました。よじれた水を入れたペットボトルは、ずつしりと重く感じます。

「こんな重たいもん、学校まで持つて帰るの……。」

あの道のりを考へるとうんざりしました。

「じうせするだけやの。」

ペットボトルをリュックサックに入れようとするわたしの手が止まつていました。

そのときです。

「さすが、うまいなあ。」

ふいの声におどろいてふり返ると、としゆきさんのがわたしのかいた絵を見ていました。

「水がじゅうこきれいやんか。」

としゆきさんはやつ語うと、集合場所へ走つてこきました。  
わたしは、はつとしました。

「そうや、そうやつた。」

わたしは、ペットボトルをしまし、リュックサックをせ負こました。来るときよりも重くて、かたにずつしりと感じます。

帰りは、のぼってきた坂道を下ります。けい流の音がすがすがしくひびき、きれいな水は、太陽の光を受けて、じつそうまくしきらきらとかがやいて見えました。

わたしは歩きながら、自分のかいた絵をもう一度見ました。きれいな水がうまくかけています。せ中の荷物は重いのに、足取りはなんだか軽くなつてくるように感じました。